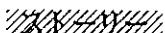


スタンツ 緒(おは)

作 び

場面 地獄とおもわしき場所 キャスト カンタはじめスカウトだった者たち数名。

スタイル 出来るかぎり細身のアバラの目立つ者、上半身裸、腰に白布（三角巾など）



スカウトとしてふさわしくない行動をしたために、地獄とおもわしきこの場所で苦しみを受けている。あるものは制服を集会場で着替えたり、あるものはウソの用事を作って集会をサボったり、あるものは班ハイクで計画書にないコースを歩いて遅くなり、リーダーに心配をかけたり、本人たちはさほど悪いとは思っていない、ここでこのような責苦を受けなければならぬことに不満を感じている。そしてもっと悪いやつがここで苦しむべきだと叫んでいる。もっと悪いやつ、それはカンタ班長で、遅刻、無断欠席はもとより、喫煙するなど、けっこうな悪ガキで、回りの皆もこの苦しみを一手に受けてほしいと、自分のことは棚にあげるぐらいであった。当のカンタもあれだけ悪をしたのだからと、この責苦も仕方なしと毎日この地獄とおもわしき所での生活をしている。

そんなカンタにもたったひとつだけ良いところがあった。それはロープ結びが上手でこれだけは班訓練のなかで素晴らしい、班員に喜ばれていた。（カンタ以外の者が過去の評価を話す）

ある日のこと、いつものように苦しみを受けていたが、耐えきれず倒れてしまったその手に触れるものがあった。それは1本の細いロープではないか。（いかにもロープがあるように演技する）見上げるとずっと上のほう遙か彼方よりぶらさがっているではないか。しめたと思ったカンタはこの細いロープを上り始めた。すこし昇ったところで下を見て見ると、先ほどまで苦しみを受けていたあの炎の海から遠ざかるではないか。うれしさがこみあげてくる。さらにのぼりつづけた。

明りが見えてきた、もうすこしだ、そう言って下をながめた。炎の海はもう点にしかみえない。ところがこの細いロープになにかがまとわりついているのを発見する。遙か下のほうに大勢の者が昇ってくるではないか（營火の反対側で同じくロープを昇る演技をする。このとき上方を見る。カンタは下方を見る。）カンタは叫ぶ。そんなにぶらさがったらロープが切れる。おりろ、おりろとどなった。それでもみんなは昇ってくる。

カンタはありったけの声を振り絞って〔これは、俺さまのロープだ！〕と叫んだ瞬間（バシッと音を鳴らす）カンタも他の者たちもクルクル舞いながら落ちていった。（時計回りに回転しながら營火を一周して、他の者たちから先にサークルの外に退場する。）

幕。

歌〔この道をゆく〕合唱。

このスタンツの演技の鍵は、平面の円形舞台で上下の関係を演ずるところにある。